

新建築、落成するまで

10

T · A 生

此度落成した新教室の建築の模様を書けと言ふ編集部からの依頼を受けたが、去年の事を色々今から思ひ出さうとしても仲々はつきりしない。勿論、だんだん教室が建築されて行く有様を、毎日毎日見て居たわけであるが、毎日見て居たが爲めに却つてその變化を叙述すると言ふ事は困難であるやうに思ふ。何となれば、あまりに親しく見過ぎて居たからである。

丁度親子兄弟の一家族が、同じ家に住つて居れば、親が段々年老いて行くのも、子供が著しく成長して行くのも、共に相互に氣付かずに居る言ふのと同じ理屈であらう。ここか遠方の親戚のものが何十年ぶりにやつて来て、びつくりするやうに、去る三月上旬、山本教授が海外から歸朝せられて、自分の教室に歸つて來られた時には、入口がどこであるか、方角がさうであるか、全然判らずに、さながら歐米の天文臺の視察の續きさしか感ぜられなかつたと言ふが、實際、吾々天文臺の連中は、丁度、グリーンニツチの天文臺員が、參觀者を色々説明して案内して歩く様に、『こゝが圖書室で

す』『こゝが、實驗室でこゝが時計室です』『これがこれからお持ち歸りの十三吋を据えつくべき赤道儀室です』と言ふ工合いに、同教室を案内したものだ。するに山本教授は『一寸待ち給へ、扱て、此處では、こちらが北ですか』と言ふやうな質問さえなさる。で吾々は非常に大きな誇を感じずには居られなかつたのである。

事實、過去一年間の我教室の變化は非常なものであつた。正しくそれは東京のどこか一部分の震災前後以上の變化であつた。そう言ふ變化の一年を、私は一ヶ月づゝ位の間隔を置いて時に見て置けばよかつたのである。そうするにさう言ふ工合にして建築が出來上つたかを精細に叙述することが出來たであらう。不幸にして私は毎日コンチニユアスに見て來たので、たゞいつの間か新教室が出來上がつて居たと言ふより他はない。が、こゝに角、自分の記憶に思ひ出すだけ、建築の模様なきを書いて、吾が新教室の落成を天界紙上に祝ふ一端を思ふ。

一昨年即ち大正十二年から、吾が宇宙物理学教室の建築擴張の氣運は成つて居た。豫算も決定して居たのであるが、色々な事情の爲めに工事の着手が遅れて、愈々着手したのは確か昨年二月の六日頃であつたか記憶する。今までの教室、即ち御大典の時の頂戴物の木造バラックの西側には物置さか便所さかあり、其の北側即ち尊攘堂の西裏には、子午儀室ミ星學實驗室ミがあり、その實驗室の地下室は基準時計のリーフラーが置いてある。先づこれ等の建物に立のきを命じなくてはならない。その立のきの着手がその頃から始まつた。

然し、困つた事には時計が安置してある地下室をそのまゝにして置いて、その上に北館を立てやうと云ふので、可なり頭を悩したが、結局、時計はその儘にして置いて、地下室には水がもらないやうな方法を講じ、上だけを七吋の赤道儀室の隣まで滑らした。これと同時に南館の工事を先づ始め、土地を掘り、丸太にて足場を組みして、工事の方が着々進む間、教室の連中は、實驗室にあつた道具や機械の運搬、片付なごで、急がしい目を見て居た。

然し其の間に、工事は日々進んで、三月には、コンクリートを粘り石を混じ、サイコロの様な形をして鐵の器がグルグル廻轉して、下から下から、板で組立て、行く、型の中にザラ／＼流し込むコンクリート工事が始まつて居たのである。

其の頃四、五月の頃の筈が毎日、延びて行くやうに、毎日大學に出て来ては、板の箱が段々ミ上に延びて行くのを見た。仕事をする人達は毎日同じ事をやつて居る。やかましい槌の音や、機械の廻轉する音、そうしたものが毎日朝から夕まで鳴り響いて居たが、『日新又日新』で、見る者から云ふミ段々眼の角度を上に向けて行かねばならない。

やがて夏が来た。梅雨が齊れるミ夏も盛りになつた。夏休みに入る頃はもうすつかり頂上まで、混凝土が、つまれてあつたやうに思ふ。つまれると言ふミ、おかしいが、混凝土の素焼が先づ出来上つたのである。でこれから板の皮をはぎ、上塗りをかけねばならぬ。

南館、北館の大體の構造が出来あがるミ同時に、附屬の小使部屋や廊下の建築が着手せられたやうに思ふ。

八月に入つて私は、一ヶ月ばかり大學を御無沙汰したが、一ヶ月も見ずに居るミ、其の間の變化は著るしく眼につく。九月の始め久し振りで、大學に出て來るミ、灰白色に輝く兩棟の建物が巍然ミ聳えて居るではないか。面目一新ミは實に此の事で、私は此時ほミ嬉敷感じた事はない。私は早速部屋々々を見廻つたのを覚えて居る。間取りの様や廊下の工合なごを見廻りながら、机をさう言ふ工合に置こうミか、書棚をさの位置に置かうミか考へながら、足場の悪い床の上をあち

らこちらに徘徊した。

とも角これですつかり外側は出来あがつた。で床や、壁や水道や電気ミ内部の完成が残されて居る。小使部屋も出来上り、廊下も完成した。舊館の西の壁を切り開いて新しい新舊兩館の通路が出来上つたのは九日十三日であつた。



床や壁が塗られ、戸や窓がすつかり完成し、床にリノリウムがしかれ、水道や瓦斯が引かれ、先づ南館が十月末に落成したので、新しく作つた本棚や、机を運び入れて先づ、書物を運び、各々の定められた部屋に移轉し終つたのは十一月の中旬であつた。

然し北館の方はまだ、すつかり落成しなかつた。ミ言ふのは、最も大切な部分たる丸屋根が出来ないからである。丸屋根が出来ない爲めに、その下の部屋部屋の壁や床を塗る譯に行かず、そのまゝになつて居たが、丸屋根の上下以外の部分は殆んど完成した。

丸屋根の建築は、天文臺獨特のもので、これは普通の建築の専門外である。ミ言ふのは、丸屋根は動かなくてはならないからである。川崎造船所の受負で、昨年中に出来る筈であつたが、ついに間に合はず、鐵材が運ばれ、愈々丸屋根の組立てが始まつたのは十二月の十二日だつたと思ふ。川崎造船所の職工達が、軍艦か、汽船の一部分でも造るやうな工合に

弧狀になつた鐵フレームを組立て先づ半球上のドームの形骸が出来、板をはり、銅板の屋根を葺ひて二月上旬丸屋根の外形は出来あがつて、内部の工事や丸屋根の廻轉さ、開閉の仕懸がすつかり出来上つたのは四月に入つてからである。



二月の或る夕暮であつた。私は、一日の仕事を終えて、出町の橋の上を歩いて居た。夕陽が正に西の山にかゝらうさして居て、その幽かな光線が、水平に世界を照らして居た。少し曇つた日であつた。で光線の工合は非常に悪かつたし、それに少し霞んで居たやうにも思ふ。

出町橋の西詰に、大勢の人が集つて東の方を指しながら伸びて見、すかして見しながらさわいで居た。

『火事だ』

そうした聲が呼び合つて居た。私も特に火事に興味をおぼえるわけではないが、立留つて人々の指さす方を見た、成ほご火事だ。葉の落ちた木々の上に、燃え上る煙が見える、何だかちらちら炎が躍るやうである。一體さこだらう。何だか大學の方面である。一度、行き過ぎやうさしたが、少々氣になつたので、再び後戻りして、よく見なをした。さうもわからぬ。が兎も角煙が燃え上つて居るやうに見える、けれども煙がないのは何故だらう。私は約十分ばかりも立留つて考へて見た。

そのうちに人達も、『何だか火事ではなさうだ』と言ふので四五人なほ熱心に見て居る人達を残して退散したが、原因がわからないものをそのまゝ、わからぬなりに、見捨て行くのも腹立たしい感じがあり、それに、愈々わからなければ、愈々癪なので、尙ほしばらく立留つて見て居たが、太陽が没するにつれて、やつこその正體が判明したのである。

それは實に、天文臺の出來上つたばかりの丸屋根ではないか。丁度沈まんこする、夕陽を反射して、銅の屋根板が丁度炎のやうに、然も少し悪い天氣工合で、丁度燃えあがる火事の焰のやうに見えたのである。

私は思はず苦笑した。思えば馬鹿らしくもある。更にこの事實にいつまでも思い當らなかつた事に對して腹立たしくもある。けれども私は言ひ知れぬ嬉しさを抱きながら家に歸つたのである。それは『吾々の天文臺は落成した』と言ふ嬉しさであつた。(一九二五、五、三二)

● 京都帝國大學の夏期天文講演

毎年八月初旬に開かれる京都大學の夏期講演會に、今年には山本教授の「太陽系の天文学」が含まれてあることは前にも記した通り。日は八月三日より同八日まで、毎朝八時開講。

講演概要は左の通り。

太陽系の天文学

理學部教授 山本一清述

序論 背景としての星座

第一講 太陽系の力學關係

イ、運動論

甲、「二體問題」——拋物運動(地球上で、宇宙で)、楕圓運動、ケプレル法則、太陽視差、拋物線、双曲線、軌道要素、遊星、衛星質量決定、彗星、流星、軌道法、ガス、太陽熱。

乙、「三體問題」——解けるものと解けないもの、遊星攝動、長年均差、小遊星、土星環、水星の謎、未知星の搜索、共振、衛星軌道、三角解法、直線解法、太陰論、潮汐、歳差、緯度變化。

ロ、天體形狀論——ニュートンまで、マクロリン形、ヤコービ形、ポアンカレ形、ダーン。

第二講 太陽系の球面天文学

イ、天球と座標——天球、星座、地平座標、赤道座標、黃道座標、相對座標。

ロ、運行と曆——日週運動、出沒、週極、晝夜、月。

年週運動、曆、遊星の運動、日食と月蝕、掩蔽、通過、遊星面の現象、

第三講 太陽系の物理學

イ、太陽——形と大きさ、光熱、構造、黒點、コロナ、

ロ、遊星と衛星——分類、下等星、地球星、巨星、遠星、小遊星、彗星と流星、——形と大きさ、光と分析、彗星と流星、隕石、

第四講 總括

イ、安定問題、——ポアネ法則、永續攝動、週期變動、抵抗物質

ロ、進化論——カント、ラプラス、モルトルン、ジーンズ。

以上